

---

# 刻の涙（ネタ

へんたいにーと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

刻の涙（ネタ

### 【Zコード】

Z1595BA

### 【作者名】

へんたいにーと

### 【あらすじ】

機動戦士Ζガンダムのファンフィクションです。

20代半ばの主人公がΖのキャラクターに憑依する……といったお話になります。1話の段階で既にΖのエマ、暴力的なブライト成分が検出されますのでご注意ください。

プロットとか作ってないのでかなり綿りのないゆるい小説になります。基本的にネタ小説ですので、原作が汚されるのが許せない方、作者に向ふ心とか絶えぬ努力を求める方は読まれないほうが

いいかと思います。

続けるかどうかは読まれた方の反応次第といふことで、適当に感想等頂けたら嬉しいです。それではどうぞ。

## プロローグ

### プロローグ

「ふざけんなよおおつ糞があああー！」

この世界に来てやけにいい声で俺が初めて口にした台詞だ。

俺は今、モビルスーツに乗っている。機種はガンダムマーク?、3号機。勘のいいガンダムオタクの人はもう気づいたかもしれない。この機体はジエリドが乗っていたものだ。それに俺が乗っている。そうなんだよ、俺ジエリドになっちゃったみたいなんだな、これが。ああ自己紹介がまだだつたね。俺の名前はルパン三世。ではなくて、吉田太郎。フラン大学を卒業後、コンビニアルバイトとして活躍しているじごく普通の20代NAKABA。

それがどういうわけかアニメ機動戦士Ζガンダムの世界というかお話しの中というか、まあ俺にもよくわかつてないからなんて言えぱいいのかわかんないんだ。

いや実は少しならわかってる、認めたくないんだけどね。このちつぽけなコシクピットに来る前に一度神様的なものに会つてるんだよこれが。

いやあジビツたね。　おいおいちょっと！飽き飽きするなよ。まあわかる、ネット小説での常套句だもんなこれ。でもなあそんな創作活動の常套手段が実際に起つたんだからそりゃあジビツたんだよ俺は。

神様はなんというかおたくっぽかった。デブで禿げてて眼鏡の東洋系のおっさん。恰好も下は青いプーマのジャージで上は神様つて文字がプリントされてる白Tのみ。

炬燵に入りながらジエリード×カミーゴのBLヒロ同人を読んでた。君たちはこんなもの慣れてるだろうから鼻で笑うだけだろうけど、俺は超ビビったね、神威のカケラも無えんだから。

「あのすいません」

恐る恐る声をかけると神様はエロ同人から目をあげ、油で墨つたレンズの黒ぶち眼鏡をむくんだ中指でずりあげながらこいつを見た。

「あ、きたの？ はいはい」

軽い調子でそう言ひと俺の事を上から下までジロジロと値踏みするよに見た拳句、

「君たち下等生物のエロ同人。うん、いいね。こういうベクトルの創作もいい。糞虫の癖にやるじゃないか。」

そつのかまつた。俺は固まつた。

「……あの、エレベーターですか？」

「ガンダム、そうガンダム。あれもいいね。なかなか面白い。キャラクターがいいよ。君にはエロ同人っぽく活動できるような祝福をあげよう。そうだな……BLもいいしひででもSMでも、スカトロ腹ボテ、カニバリズムとなんでもござれだ。まあノーマルに勤めてもらつてもかまわないよ。僕から言える事はひとつ、死ぬまで変態でいてくれたまえ……以上だ」

何言つてんだこいつ

「なに、心配しなくても大丈夫。君ならやつとできるや。じゃそつ  
いつことで」

「え？」

そして俺はティーターンズのジョリード・メサ中尉となつて墜落したガ  
ンダムMK-?のコクピットに搭乗しているというわけだ。

墜落した先はグリーンノアーにおける連邦軍本部ビル。本部ビルに  
背部をつっこんで尻もちをついたような格好のマーク?の足元には、  
連邦の兵士たちが事態を収束させるために動きだしているのが見て  
取れた。

俺はこの世界に来てから一度田の叫びをあげる。

「ふやけんなよおおつ糞がああああ！」

# 1話

## 第一話

（やあ諸君。ジョリドメサの身体に憑依した吉田太郎こと俺は、神への怒りをその美声余すことなくコクピット内で罵声の限りを響き渡させていた！……のだがいい加減外に出ないと3号機の回収、撤去ができないので外に出たところで周りの兵から階級を無視したからかいの数々を受け、再び堪忍袋の緒が切れる事になつたんだなこれが。）

「ジョリド中尉が落っこちたつてよー。」

「ジョリド中尉があ？…ジバッかやつてるよ？…じゃティターンズ失格だなー。」

足周りでグラグラと笑っている下士官達はジョリドが「シクピットから出てきて顔を覗かしてもまだ嘲笑つていた。

「うるせえぞ三下共があああツツ！ボケえ！カスう！チンピラアアアアー！」

一瞬にしてあたりが静まり返る。多くの冷ややかな眼差しがジョリドを射ぬぐが、ジョリドは止まれなかつた。

「……俺のせいじゃねえぞッ！バカ野郎コノ野郎ツー！神を恨め！神を！」

3号機墜落事故のせいで被害を受けた、今までに護送されようとして

ている怪我人へ捨て台詞を吐いて「クピットから足へ、足から地面へと降り立つとヘルメットを脱ぎ、思い切り地面にたたきつける。ヘルメットが地面にたたきつけられた瞬間、轟音がコロニー内に響き渡り、一拍の間の後サイレンがけたましく鳴り響いた。

「空襲警報ツ……空襲警報ツ……」

その音を合図に静止していた兵たちが一斉にあわただしく動き始め、蜘蛛の子を散らすように去って行つた。

「神のせいにしやがつてゐるぜ、ほんとティターンズにろくな奴はないよな……」

「おい、聞かれるぞ」

残つた整備兵達がボソボソと陰口を言いながら3号機を運搬用トラックに乗せるために各自の仕事をこなす。

「オノーレエー！――そこつるせーぞ！バー・カバーカ！」

ジエリードはサイレンが響く中耳をそばだて怒鳴り散らしていた。この整備兵たちに何の罪もないのだが、感情が安定しない。鼻息荒く怒りを誰かにぶつけて発散させていたのだ。

それくらいジエリードは自分の境遇に腹がたつた。否、その境遇にさせた神こそに腹が立つた。

（神ぶつ殺す……マジで神殺す神殺す神殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す）  
（ヒヒヒヒヒヒヒヒヒイ！――）

(何で俺がこんな目に会わなきやいけねーんだボケカスチンピラボ  
ケエエエ)

ジョリードは自分のことしか考える事が出来ずに、あたり一帯に怒鳴り散らした。だからこの後すぐにその報いを受ける事になる。

「ちょっとージョリード・メサ中尉ツ！」

背後から甲高い声で呼ばれてもジョリードはなれない名前ため数秒気付かなかつた。

「……あ、俺か、ナンダボケコラアアア！…」

振り返つてその声の主に思い切り顎をしゃくつて眼を飛ばす。ガンを飛ばされてもその人物は臆せず、乗ってきたジープから颯爽と飛びおりると、胸ぐらをつかんできた。

「ジョリードメサ中尉！無理な行動がこいつの結果につながることは十分に分かつていたはずです」

ぐっと顔を寄せてジョリードの目からその縁の瞳を離さない人物にジョリードは大いに焦つた。

「あ、あんたは！……エマ・シーン！」

そう、エマシーン中尉である。ダークブラウンのショートヘアの上に濃い紺色のベレー帽を頭に乗せており、ベレー帽にはティターンズのワッペンがワンポイントでしつらわれている。

全身はジョリードと同じティターンズのシンボルカラーであるネイビーブルーのパイロットスーツに覆われていた。日系9世だと言う彼

女のきめ細やかな肌の色にはその名残が強く表れていたがその瞳は美しく、鮮やかな緑色で磨き抜かれたエメラルドのようであつたし、肌の色以外は顔のどのパートをとっても日本人の血はあまり感じられなかつた。

スタイルも出るといふは出ており、24歳という妙齢のヒマを皿と鼻の先に皿の前にしじょりじょ思わず尻込みした。

「禁止されている超低空飛行を居住区行つとはどういうア見？人にボケだのなんだの言ひ前にちやんとした操縦を行つたらどうなの？だいたい我々は自力でモビルスーツの回収をする力をつける訓練だつてやつてきたわ。それがこの体たらへ……あなた、パイロットをやめたら？」

(圧倒的破壊力ッ！……！)

ヒマ・シーンは俺に一気に捲し立てるべく胸ぐらをひとまず離し俺の出方を待つた。

「…………た」

「え？何？聞こえないわ？軍に入つた時声の出し方は最初に墜つたでしょ？サイレンが鳴つているんだから……」

態度に軽蔑した色を見せるヒマ。

「本当にすいませんでしたーっ！！ボケとかコラとか墜落したりしてほんと申し訳ありませんでしたーっ！！」

斜め45度の角度でヒマに頭を下げるまま固まるジョリード。神にも

たらされたその怒りは完全にエマの氣勢によつてそがれ萎えしほんでいた。

頭を下げたまま固まるジョリドを見降ろしながらエマは一言も発さない。時たま腰を曲げたままチラッと顔を上げエマを見上げるジョリドだが、エマは冷徹に見降ろし続けるためジョリドは慌ててまた頭を下げる。固まる。

その光景にエマは人知れず快感を覚え、股がうずくを感じたりしていたがジョリドに知る由もなし。彼女は生粋の少女であつた。この膠着を解いたのは連邦軍の制服に身を包んだ黒髪の男、アニメでは白目のみ描かれない事で有名なブライト・ノア中佐だった。

「何をしているッ！警報が聞こえないのか！」

ブライトは走りながらひりひりとやつてくると整備兵たちに指示を飛ばし始めた。

「ブライトキャプテン！」

エマが尊敬のまなざしでブライトを見る。彼は一年戦争時ホワイトベースのキャプテンとして力を發揮し、英雄だった。しかし今の軍の上層部からの扱いはとてもその称号に合わぬものであつたが、連邦兵たちからの信頼は厚い。もつともエマのようにティーターンズの一員は自分たちの組織以外を格下と見る傾向が非常に強いため、ティーターンズの中でブライトに尊敬のまなざしを送るものは少數派と言えた。

エマの凍てつくようなまなざしが自分の後頭部から逸れた事を感じ取つたジョリドはこの隙を逃さずに素早く頭を上げた。流石にもう謝るのは十分だろう。

「だれが頭を上げていいと言つたの？！」

しかしその田論見は外れエマに怒鳴りつけられてしまつた。すかさず頭を下げる。それはもつ自然な動作だつた。条件反射で下げてしまうのだ。

(「リハして人は調教されていくのかな）

ジエリードは頭を下げながら悲しみにくれた。

ブライトは周辺の兵に一通りの命令を終えると、まだ頭を下げているジエリードの金髪を掴み、強引に頭をあげさせた。

「対応しろと言つているのがわからんのかッ！」

「痛ツツ痛いイタイイタイイタイツすついたつまじでつ」

「復唱せんかツ！」

髪の毛を掴まれたまま半べそをかいてジエリードは敬礼した。

「ジエ、ジエリード・メサ中尉、……対応します！」

（な、なんか原作と全然流れ違つじゃねーかよツ！みんな怖ええよ  
何なんだよ。神死ね！神死ね！…）

ジエリードはこれ以上一人のそばにいるどんな田に会うかわからぬ  
いと考え、エマ中尉の乗ってきたジープに飛び乗り、運転手に出す  
ように言つ。

「中尉どこ行くのー！」

「た、対応するんですー！」

エマの問いかけにジョンリードが返答したが、エマが獲物を見るかのような鋭い目でジョンリードを睨んでいたためジョンリードの声は裏返つてしまっていた。

ヒマシーンには近づかないでおじつと心に決めたジーリードであった。

## 第一話

ジェリードを乗せたジープが戦場を駆け抜ける。今しがたまで閑静な住宅街であったグリーンノア1内部は今や戦場であった。エウーゴのクワトロ大尉率いるリックディアス隊は、グリーンノア1に配備されている旧式のジム？ではとても相手にできるものではなく、彼らを止めることができず次々に撃墜されていく。

ジープが猛スピードで幅広の道を駆ける。風圧により田をしばたとかせながらもジェリードはその光景に田を離せずにいた。

「また一機やられた！中の人は無事なのか！？」

命の瞬きをジョリードは今、田にしているのだ。

「ふ、伏せてください！」

運転手の突然の叫びに、ジョリードは素直に従つた。ジープ進行方向付近で、リックディアスへ奉制のバルカンを放つていたジムの薬きょうが、道路上に落ちた拍子に飛び跳ねて、こちらへ向かってきていたからだ。

ブオオンッと薬きょうの空気の切り裂く音と、道路にドラム缶が跳ねまわつていいのような音が響き間一髪、ジープの衝突直前でバウンドしたその巨大な薬きょうは太郎達の頭上数十センチをかすめて通り過ぎていった。

「し、死ぬっ！こんなとこにいたら死んじまうぞ、何とかしろ！運

「取りあえず宇宙港にむかいますよー。」

運転手がジープの無線をいじり状況を確かめようとするが、悲鳴や銃声ばかりが入ってくる。

「畜生っ本部は何やつてるんだー！ロードにモビルスーツが侵入してるんだぞー！」

運転手の叫びに連なるように次々とロード一体に爆発音が連なった。ジムがクワトロ隊に墜とされて爆散している音だがジョリドにはミサイルが次々と着弾しているように思えた。

引っ込めていた頭をあげてあたりを見回す。あちこちで煙が上がり、民間人の住宅の中には原形をとどめていないほどひどく損傷したものもあった。爆裂したジム？の破片が突っ込んだのだろう。ジョリドはゾッとした。こんな自分の知っているガンダムではない。

（「一体」の襲撃で何人の人死<sup>ひとじじ</sup>が出るんだ。これじゃあまるで……）

「これじゃあまるで、戦争じゃないか」

自分で気つかぬうちに発した一言に、ジョリドは驚いた。

（やうだ、何を言つているんだ俺は、戦争なんだよ。ガンダムって……）

「中尉！メサ中尉！……、失礼しますー。」

呆然としているジムのパイロットがまだ生きているようです。無線で助けを求めていました。ミノフスキー粒

子も強まっていますし、我々以外にこの無線を傍受できたものはいないかもしません。少し引き返すことになりますが助けましょう！」

「あ、ああ。わかつた行こう」

ジェリードは頭を振つて気合いを入れ直すと、恐怖で唇をかみしめながらも救出することを許可した。

3度ほどジープで道を曲がつてほどなくすると足から墜ちたのだろう。ジム？の脚部や装甲がバラバラにはじけ飛んで、家々に突き刺さっている。

家々から上がる粉塵と煙が道いつぱいに立ち込めており、視界の確保が難しい。数メートル先も見えない状況だ。

速度を落としゅっくりと進むジープはやがて機体の胴体部分を発見した。煙を上げ仰向けに転がっているそれはコクピットを保護する前部装甲がひんまがつていてるが、開かれていた。

「もしかしたらもう脱出したのかもしれません

二人はジープを下りると徒步で近づき、安否を確かめた。

「大丈夫かー！まだ生きてるかー！」

煙で目を瞬かせ、喉を焼かれながらジエリードは懸命に叫び、またパイロットも懸命に反応した。よわよわしい声だが、助けを求める。

「おい、生きてるー生きてるぞー！」

聞き取つたジエリードは運転手に叫ぶと機体へとよじ登るために駆けだしたが、すぐに足を止めた。軍用ブーツの靴底に粘着性の高い液体を感じ取つたからだ。

強いオイルの臭いだ。煙が立ち込めて、家々からは火の手が上がっている。心拍数が上がり、呼吸が浅くなる。

同じく駆けだしていた運転手がジエリードを止めた。

「中尉！ オイルが漏れています。危険です！」

しかしジエリードはその声が合図となつたかのよつて駆けだすと、機体へとよじ登る。

コクピットの中をのぞくと、太ももに鉄のパイプが刺さつて座席と縫い合わせられている顔の青いパイロットと曰があった。

「「こつを、……抜いてくれ」

顔は青い、唇がかさつき声もかすれている。一目で血が足りていないと分かつた。しかしその眼にはまだ力が宿っている。ひとまずパイロットが生きている事に安堵したジエリードだったが、次の困難に頭を抱えた。もしこのパイプが太ももの大動脈を傷つければ、引き抜いた後の出血で死んでしまうのではないか。

「運転手...」つから宇宙港までどのくらいだ！」  
ドライバー

下でこちらをうかがつてゐるだらう兵士に尋ねる。煙の被害は甚大で30センチ先ももう見えなかつた。

「10分くらいです！」

「よし。その場で待機しろ。俺が合図したら声を出し続けれろ！今からパイロットを抱えてそっちに行くからな！」

「了解！」

声の方向を確認するとパイロットに田くばせする。頷いたのを確認し、鉄パイプをひきぬく。ズッズッズとシートをする音や粘着質な水音をたてながらパイプが抜けていく。

「ああああああああああああああああああああ」

パイロットの悲痛な叫び声と肉を貫くパイプの振動に顔をしかめながらもジェリードは鉄パイプを抜ききつた。

と慎重にジムの胴体から降りた。

「声出セー！」

「ほこりであります。」

喉が煙でいぶされた、ドライバーはかすれた声で叫び続けた。そのかいあつてジエリードとドライバー合流するとジープへと進んでいく。ジープは強烈なヘッドライトを灯したままアイドリング状態で置いてあるため、音と光ですぐに見つかった。

医療キットを使い、足を縛った。

本職の衛生兵ではないため止血の仕方もあるているか定かではない。一刻も早く本格的な治療が必要だと言えた。

「宇宙港に行けば、医者がいるはずです。出払ってても衛生兵はいるでしょう。後はナビに従つて飛ばすだけです！」

火災が発生している区域から抜けると、タイヤ痕を残し煙を上げながら猛スピードでジープを走行させる。ジェリドは名も知れぬパイロットの足を包帯できつく縛りあげた箇所からあふれだす血を懸命に両手で抑えつけていた。

パイロットの意識は戻つており、苦痛にあえいでいる。そんな状況にもかかわらず3人の瞳には力強さが感じられた。このまайけば全員助かるかもしれないとその望みが3人の心を高めていた。

「あつー！」

突然運転手が叫んだためジェリドが進行方向へ振り向くと、ジム？が一機こちらへ背を向けて空を飛ぶ赤いリックディアスへとビームスプレー・ガンを乱射している。

「回り道する時間はない。このまま突っ込みます！」

「あつー、おいー！」

運転手はそう告げると、ジェリドが制止するようとするのもかまわずさらにアクセルを踏みしめ回転数を上げ、ジム？の足元をすり抜けた瞬間だった。

乱射されたビームを全て避けながら赤いリックディアスは牽制のため、頭部の5.5mmバルカンをばら撒いた。バルカンはアスファル

トを削りながらジム？の脚部とその周辺に着弾。未だジム？の足元を走っていたジープに迫りくる。

目の前のアスファルトが爆ぜ道路がめぐれ上がった。咄嗟に運転手がハンドルを切りブレーキを踏んだため車体がスピンする。その遠心力に耐えられずジェリードは宙を舞つた。

「ああああああっ！－！」

ぐわんぐわんと耳鳴りを響かせながら景色が急速に変わっていく。車体から振りだされ5メートルは宙を舞つたジェリードはそのまま道路脇の茂みに落下し、背中をしたたかに打ちつけたため呼吸が止まり視界が赤く染まつた。

「 カハッ……」う

数秒気絶していたのかもしれない。頭を振つて立ちあがろうとするが鋭い痛みのせい立ちあがる事は困難だった。それでも何とか立ちあがりきると急激に咳き込み、口からドロッとした血が噴きだす。

（……内臓をどつか痛めたのかもしれない）

深く呼吸しようとすると肺がきしむ様に胸が痛むため、甲高い呼吸音を発しながら浅い呼吸を繰り返し周りを見渡すと、数十メートル先に炎上した鉄の塊となつてしまつたジープ、そして人間だったものの数々が散乱していた。

## 2話（後書き）

誰も反応してくれないので悔しくて結局書いてしまったwwwキー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1595ba/>

---

刻の涙（ネタ

2012年1月4日15時53分発行